

1917年 (大正6年) [13歳]

「辰雄日誌 1917」No. 5 (1)

—— 1917年4月16日～11月7日 ——

小池辰雄

高等師範 (現筑波大学) 附属中学校 2年

○1917年4月16日 (月)

晴天。父の命日。授業後入部式行わる。帰宅せしは午後5時。直ちに父の命日なれば仙台の兄と共に染井の墓地を指して出づ。途の道悪し。墓地の中を歩む頃は日既に森に陥らんとする所なり。日陰は淋しき墓に淡き光を注ぎ、氣自ら淋しきに陥る。花、せんこを買いて求め、父の墓に拝む。四囲ただ寂寞。顧みれば、日はかすかに森のあなたに光を残す。家に帰り着きしは6時を過ぎぬ。

○1917年4月17日 (火)

晴天。桜の花、次第に時ならぬ雪とはなりて散り、次第に緑色の若葉を出だせり。家の二階の前方の亭々と聳えたる喬木もやや緑色をおびぬ。

○1917年4月18日 (水)

晴天。今日、体操の時間は50米の往復。即ち100米のRunningをす。我、19秒半を経過す。図の如き所にて怪我をす。斜に割合に深く切る。「スタート地点 (記録所) と折り返し点 (旗) のコースの図あり。怪我をせし所は旗の付近」

○1917年4月19日 (木)

晴天、後風あり。欧州戦争、独逸についての長瀬という人の談話を聞く。非常に面白く有益に聞く。

○1917年4月20日 (金) ～ 5月4日 (金)

〔記載なし〕

○1917年5月5日 (土)

雨天。ボートレース挙行するはずなれども、雨中にて明日にのぼすことになりぬ。我、場に行けども空しくすみぬ。



○1917年5月6日 (日)

晴天。7時頃一等の艇庫に着く。宮脇君、吉松君等とボートに乗りて逍遙す。その中、菊池君、納富君、天野君等来る。ボートに乗りまわすうちに、知らず時来りて遂に式に出づることを得ず。凡そ2時半頃まで愉快にボートに乗りて遊びぬ。3年とのレースは遂に勝を制せり。我も舟の中より赤旗をひるがえらせて後援をせり。甲乙のレースは遂に残念にも負けたり。かえり電車の中にて寝ぬ。

○1917年5月7日 (月)

晴天。休日。

○1917年5月8日 (火)

雨天。6時に母に呼び起こさる。時に強い雨の音、やねをつくのを聞く。それはちよつと用がありたるためなり。そはまどの綱が切れたれば、それをつなぐこともなり。まんとを着し、はしりよりて二階の雨戸を開け滑る屋根をねむき眼をこすりつつ行く。雨と風にて身は寒さを感じ。ややに屋根をつたいて、引窓の上に来る。綱をようやくにむすびつけて戻る。後ねむろうと思いたれど目覚めて眠るあたわず。呼び起こされたる時、まだ夢の盛りなれば起きがたかりしを台所のあまりにぬるるを以てす。母之を喜ぶ。「屋根の上の引窓の図あり」

○1917年5月9日 (水) ～ 7月20日 (金)

〔記載なし〕

【大正6年夏休日記】 (江ノ島、片瀬海岸旅行記)

○1917年7月21日 (土)

晴天。前日の晩はねむられないほどうれしかった。時計のはやく進んでくれることを実にこのときはいのるのであった。4時半に目がさめた。しかし5時に床を離れた。準備周到であるから、顔を清め朝飯をすませれば善いのであった。6時に鞆、包を持って家を去った。足はなんとなく早められた。やがて、武田君の家についた。6時45分にここも発した。もはや目指す片瀬の道についた。片瀬はどんなよい所であろう？ 電車に乗りこんだ。片瀬の電車である。飯田町三丁目を出発したとき既に停電の時が来ていたのであった。突如に電車は運転をとめた。何だろう。電車の中の人々は窓から首を出して見る。四方八方から人がかけ集まった。電車が後へつづくこと8台。そは自動車^{まど}が江戸川行の電車と江東橋行との電車が来る間に自動車^{まど}が横ぎろうとして丁度電車間に入った。人は蟻が餌につく



様にあつまった。しかたがないので重い荷物をさげて九段に行った。

東京駅に着いてからすこし経って改札口が開いた。喬さん、四郎くん等と汽車に乗った。車内は非常に人がすくなかった。東京市の上を車輪と共に走った。市の通りは次へ次へと送られた。やがて東京を過ぎて、景色は車輪と共に回転された。1時間半を過ぎ、目指す藤沢駅へ着いた。江ノ島電車が即ちすぐ見えた。時に9時。

山本橋に9時20分着。江ノ島電車を下りて、我等が家へとさした。地図に見える如く、見渡すかぎり松原である。即ち午前より泳ぎに行く。一番上の兄〔政美〕と青木の喬さんと実さんと四郎くんと僕と宣彦君（武田）とであつた。未だ青木の一番上の兄の三弦さんはいらっしゃらない。女中が一人いる。午後2時より泳ぎに行つて、海岸で菓子を食べる（持参の菓子なり）。夕飯後、柳沢さんの所へ行く。かえりに後の山へ上つて、即ち龍口寺に参る。日蓮上人の名刹である。〔片瀬付近略図あり。国電の藤沢駅。江ノ島電車の駅、藤沢、鵜沼、山本橋、片瀬（現在の江ノ島駅）。片瀬川。我等が家8号。砂丘、砂浜、海。註…この図にある海岸は現在の新江ノ島水族館のある片瀬西浜鵜沼海水浴場。山本橋付近には、カトリック片瀬教会、湘南白百合学園幼稚園がある〕

○1917年7月22日（日）

晴天。起床《6時半》。《今日は日曜なるを以て勉強は無し》。午前家へ手紙を書く。《午後2時より夕飯前まで海に行く》。海にて波の子（貝）やかに取つて遊んだり、矢なげ、ボールなどをする。すこし泳げる様になる。黒くもなる。夕飯後、散歩に出づ。星空に金銀の砂を撒ける如くにかがやく。江ノ島の橋の中ほどまでですみにいく。実に海の美観に涼味をそえ、言の絶する所であつた。かえりに絵葉書を買う。労れはて即ち床につく。《8時である》。起床は5時から6時半まで。就床は8時から8時半まで。これは規律。《》のあるところは規則の所である。

○1917年7月23日（月）

晴天。起床5時半。《8時15分前より9時15分まで勉強》。《程の色々な時間には本をよんだり遊んだり新聞を読んだりす》。《毎食の御飯盛はかわるがわるやる》。午前には海に入り、午後からは上の兄、喬さん、実さんと四郎君、宣彦君、僕と二組に分かれてボールをする。5対3で勝利を得る。砂浜でやる。かえつてはテニスをする。それも大勝利で非常に気持ちがいい。つりもしたがとれなかった。7時半就床す。〔海岸の波打ち際に半分砂に埋まっている二つの貝の図あり〕

○1917年7月24日（火）

晴天。今日は午後、海に入つてまた仕合をしたがとうとう負けた。13対11で負けた。午前



は数学の宿題をやる。ほぼ泳げる様になる。つりもだめ。66聯隊の兄〔龍二〕へ絵葉書を出す。

○1917年7月25日 (水)

快晴。今日も一日、三弦^{みつる}さんを待ってみたがいらつしやなかった。この間から東京の色々な人の所へ皆で菓子を送る様に書いた。今日も書いた。午後から海岸でボールをやった。僕の方の組が11対10で勝ったが見事な勝ではない。

○1917年7月26日 (木)

快晴。起床5時半。朝、宣彦君と二人で三弦さんと泰ちゃんをむかえに行つた（東京からこられるのである）。いらつしやつた。三弦は御機嫌がわるくてねられた。その氷を買いに行つた。

○1917年7月27日 (金)

晴天。三弦さんの喉は今日も悪く、一日中寝て居られた。柳沢さんが見舞いにこられた。色々とお世話になる。今日は保〔山本〕さんがこられるかと思つていたが、今日はこれなかった。窪田君の所へ小包と葉書を24日に送つたがまだこない。前に上村君の所よりきた。

○1917年7月28日 (土)

晴天。今朝、霧がかかつて寒い位であつた。保さんがこられた。9人にもなつた。三弦さんはややなおられた。夜は非常に賑やかであつた。以下は日々の規則の如し。

○1917年7月29日 (日)

晴天。起床6時。海水が冷やかであつた。保さんと泰彦君が東京へかえる。釣をしたがなにも獲物がなかった。夕方に江ノ島の栈橋まで《散歩に行く》《雨でなければ行く》。柳沢さんの家へ色々とお礼に行く。

○1917年7月30日 (月)

晴天。今日は明治天皇祭である。午後の海で武田君が目を怪我した。この日は暑かつた。今日も散歩に海岸へ行つた。行く度に肺臓が奇麗になつた様な気がする。

○1917年7月31日 (火)

晴天。数学の宿題は仕終えようと思つたが、遂に止まらなかつた。嗚呼、明日は8月か、四分の一を過ぎた。広瀬君の所から葉書が来た。僕も直ちに書いて、返事を送つた。夜トランプをした。



○1917年8月1日 (水)

晴天。例の如く海に行く。波が荒れていたので大きい人達は鵜沼へ波乗に行かれた。午後より僕等は板子を買に行った。

○1917年8月2日 (木)

晴天。今日は午前に吉原吉彌さんがこられる。この度は東京に青森より移られた。直ちに海へ行った。この頃は浮輪は一度も持つて行かない。板子を持つて行って、波乗を面白くやった。遙かのあなたが真赤になっている。蟹であろう。皆でそれに向かつて突撃を試みた。目の鋭い蟹は即ち退却の行動を取った。軍人の吉彌さんは棒をもって蟹を滅茶々々に追いかけて叩き仆した。次に包囲攻撃をした。四人で蟹をうまく追いつめて蟹は遂にこの様にかこまれた。遂に進退谷まつて川に没落してしまった。大勝利で凱旋する。家へかえつてトランプ等をしてくらしした。〔註：海にそそぐ川岸の砂浜に棒を持った四人にかこまれた蟹の群の図あり。この川は江ノ島の栈橋に近い片瀬川か、西側の鵜沼海岸にそそぐ辻堂との境の引地川であらうか〕

○1917年8月3日 (金)

雨天。朝、散歩に行った。途中で雨に出会ったので大急ぎで家に帰った。今日は晴れた。雨になったり曇ったりした。夕方、江ノ島に散歩に行った。海の波は非常に荒れていた。風も非常にあった。天には薄い雲が流れていた。江ノ島の地を踏んだことが未だ嘗てない。歩く両側の店では女が一生懸命に売れんことをはからつて、色々な文句を暗礁している。がけの上から海をながめたときのおそろしさ。はるかの下で波が打っている。はじめて栄螺^{さざえ}の壺焼を食べた。晩に吉彌さんが帰られた。

○1917年8月4日 (土)

晴天。風強し。非常な風で一度障子が倒れて頭を打った。海岸へ行くと、砂がたいへんな速度で走っている。吹き飛ばされそうであった。夕方、川で泳いだ。

○1917年8月5日 (日)

快晴。風涼し。朝、起きれば蚊帳の外より温暖な日光と涼風が来ていた。昨日のことは忘れた様に晴れていた。海岸で遙かの連峰と近くの海を写生した。富士、神山、二子山、箱根、大山など空高くその美麗なる姿を表わして居た。

○1917年8月6日 (月)

晴天。午前に7人で所謂片瀬の人の泳ぐ所へ行つて雁行をなして泳いだ (絵の如く)。人



が大勢集まって泳いでいるまわりをまわって遠泳をした。悉々両輪伸である。一度そこをまわって向こうへ着こうと思ったが、まわれ右をなして、こんどは栈橋目がけて進んだ。栈橋の元を去ること10間の所でやめた。僕は初め1町泳げるかなあと思ってたくらいであったのに、あさましさに吃驚した。7、8町泳いだ。驚いたが全く嬉しかった。家へ戻る途中、舟が海へ出せないでこまっていたので、我等7人で手つだって海へ出した。夜、例の如く散歩に行った。家へかえった時の足のだるさ。今日午後、三弦さんがかえられた。「片瀬海岸東浜での遠泳の図あり。東浜から東（鎌倉方向）へ向かったのち、反転して西へ折り返して江ノ島の栈橋の手前まで泳ぐ」

○1917年8月7日 (火)

晴天。水泳は段々上手になつて来た。

○1917年8月8日 (水)

晴天一時曇る。今日も別に記す様なことはない。夜散歩に行ったが、眠いので僕等だけは引きかえした。以前にかくべき事であるが、『井戸である』。又、近頃は門のあたり、庭などに水をまく規則が出来た。

○1917年8月9日 (木)

快晴。今朝、三弦さんと泰彦君が来る。即ち海に行く。毎日あることであるが、今日も地引をしていた。跳ねる魚水をちらす。即ちその元気をくじけた。12時家へ帰る。

○1917年8月10日 (金)

晴天。江ノ島に舟を出して行った。山二つという所の少し先である。海水がとろんとしていて下の、岸やも、べら、ふぐ、くらげなどの群の静かに岩の間を面白そうに泳ぎまわるのが見えた。帰りは泳いで着く（すずきの7、8匹が藻をあせっているのも見る）。

○1917年8月11日 (土)

快晴。朝非常に天気がよかったので、海岸へ写生に行った。富士、箱根、大山、二子山、神山等、悉くその姿を表わしていた。

○1917年8月12日 (日)

〔記載なし〕



○1917年8月13日 (月)

海の波が荒れて居たので波乗をした。散歩は今日もした。

○1917年8月14日 (火)

晴天にして暑し。昼食が正に終え様とした時、武田の叔父様が不意にこられた。全く驚かざるを得なかった。叔父様は僕等の水泳と、江ノ島に釣に行くことをたのしみにされたが、相悪く天候の為残念にもおめにかけることが出来なかった。夕飯すませて片瀬川へ舟を出しに行った。折しも、富士、大山はその青き美麗なる姿を夕焼の紅の空に表した。やがて姿も消え失せて、金星はまず夜なることをしめした。そよそよとふく涼風に小波が川のうえに表れている。舟は風に送られて上へ上って行く青蘆もためにざわざわとそよいていた。夜は次第に更ける。全くくらくなくなつた。星は数えきれない。かえる時も来た。

○1917年8月15日 (水)

曇天。今朝、叔父様より食後に我等として名望なるとの御話をうかがつた。そして朝帰られた。夕飯後の散歩に石切場に行つた。15丈余。

○1917年8月16日 (木)

曇天。豊美さんがこられたが、雨が降つた。夕方かえられた。天候がわるくて残念であつた。夜、正勝さんを招いて色々の面白い遊びをしてくらしした。

○1917年8月17日 (金)

曇天。テニスをしたが我等小さい者の方が勝つ。午後より舟を出して櫓を漕ぐ練習をした。初めて舟をこいだので手に豆を作つたが、少しは心得た。

○1917年8月18日 (土)

晴天。午後より波乗の練習をした。又、500米のRunningもした。いよいよ2、3日延期されていた灯籠流も決行された。紅の煙雲も燃え終つたころ川には何隻の舟が遊行していた。灯籠も次第におろされて川にかげをうつしている。私も観客の一人となつて舟にのつた。小さい川に数の知れない灯籠が静かな川の中に浮いている。花火が上る。空にも美しい景色が出る。天地相對して美しき景であつた。夢の中の様で四囲より明るい光に蔽われて、舟より上ったときは夢うつつで、ぼんやりとしてしまった。やがてねむけがさして来て、だるい足をだして目は自然に初々としてしまった。

○1917年8月19日 (日)

〔記載なし〕

○1917年8月20日 (月)

晴天。昨日こられた三弦さんのお友達は今日帰られた。中内君が夜来た。残るはあと11日。悲観。前に窪田君の兄さんのお祝をいつて上げたことがあった。石黒先生からも返事をくだされたことがあった。

○1917年8月21日 (火)

晴天。朝、舟を出した。鉄橋の架してある所まで行つた。この頃はSixty-six(66)をよくやる。舟にもよくのる。

○1917年8月22日 (水)

晴天。飛行機のも凄く爆音の為に目をさまして起きた。14号機、12号機が屋根の左肩の上を通つて行つた。非常に低空を飛行した。再び帰るのを見た。機首をこなたへ向けてやがて曲げて走つて行つた。

○1917年8月23日 (木)

晴天。朝よりすこぶるよい天気であつたが、惜しいかな風が吹いて居た。併し我々は江ノ島回遊をしようと決心した。午前8時45分、腹にからしをまき、そのほかにくれと用意を整えて出発した。やがて舟で江ノ島の岸本楼の前の海まで来た。そこより雁行をなして愈々出発した時は9時32分。先頭は実さん、次に三弦さんと僕、その後には兄と宣彦君と四郎君。水冷やかにして、波はばさばさとゆる。さき天氣のよかつたのも、いささか曇に、各、その悪しき所ばかりであつた。次の時間は右の図の如し〔註…江之島遊覧図の絵葉書に江ノ島をほぼ一周する泳ぎのコースと8ヶ所の地点のタイムが書き込まれている〕。泳ぎにくいので全く悲観したが、がんばつた。幼児ヶ淵〔江ノ島の西端〕の先は非常にながされてしまった。山二ツを越えたころ尚、海水がつめたくてふるえるばかりであつた。風は反対に吹き初めて、波はなおばさばさとし、大きなうねりがくる。着いたときは11時50分凡そ2時間20分で回遊したわけである。上つたときは、足がよろよろであつた。まず江ノ島がまわれたので、後は心得がよい。3哩(マイル)〔約4.8キロ〕。

午後からは泳ぎの方をならつた。毎日、海から帰つてからは湯に入る様に今日も湯に入つて、よい心持になつて風に吹かれながらトランプをした。夜は、つかれた。足を床の上に長く延ばしてぐっすりねた。



○1917年8月24日 (金)

快晴。午前の内は曇って居たので、それを利用して鎌倉の方へ行つて見ようと、皆で菓子、弁当を携帯して柳沢さんと共に出掛けた。曇って居た天候も次第に晴れて暑い日が照りだした。海岸をつたつて稲村ヶ崎まで行く。それより権五郎餅、片瀬まんじゅうを求めた。稲村ヶ崎の頂上へ上った。そこに法則違反の者が居た。なにかという上山より写真を写しているものである。そこには名高いコッホ先生の手植の檜及び記念碑が立てられてあった。我々の昼食をした所は、今より640年前に非常に雨が降らないでこまつたとき(時宗の時代)良観という僧が居て、それが雨が降らんことを祈つた所である。

目下に広げられた景色、下は穏やかな海が鎌倉に入りこみ、海のかなかに葉山を望み、そのあたりに百帆が浮かぶのがまのあたりに見える。平野は即ち鎌倉の町である。市の中に樹木をまぜている。一目町を見るに、達展の色うつりたり。下る途、大仏を望む。温良なるお顔は全く我等の心を清やかにする。田中先生がよく鎌倉の図を物なれた様に黒板に書かれるが、鎌倉の町を見て、即ちその感を浮かべた。僕と宣彦君と泰彦君で八幡宮へ行った。その外の人は海岸伝いに中央幼年学校の水泳場をさして行つた。天候が余りによいので、急いで詣でて来た。そして皆と泳いだ。しばらく泳いでかえった。

○1917年8月25日 (土) ～ 10月29日 (月)

〔記載なし〕

○1917年10月30日 (火)

快晴。満月。我が学校の創立記念日。午前10時、本校の生徒、中学生、小学生、総員中学の第一運動場へ集合した。嘉納校長より式辞があつた。

「今日は我が学校の創立記念日であつて、大いに記念すべき日である。我が国に於て最も旧く創立せられ、又我が国として記念すべき日である」

といわれたのもおぼえている。その後一同撮影す。撮影後、中学生一同講堂へ集合し、校長より祝辞がある。又4年、5年の上級生4、5人の有益なり記憶すべき演説があつた。次の如し。

「二、日本の軍備

今や欧州では大戦乱の最中である。彼等はその戦争中、軍備に非常に重きを置き、或は毒瓦斯・装甲自動車の如きものを発明し、又毒瓦斯が出来ればそれを十分防ぐことのできるのを作るなど、化学の応用によつて非常な戦がある。又、米国の如きは一時に一万台の飛行機を製造し、一時に強大な戦艦を多数製造するなど実に軍備拡張には心をつくしているのである。顧みて我が国では戦争の為に丁度金が入つて成金になるものぞくぞくあり。金のできるのは実に頼もしいが、彼等は



ただ奢侈に流れ遊蕩荒情して空しくその金を費やし何の益にもならない。あわれむべきなり。彼等の心、又、品などをもてあそぶのである。彼の米国に比して我が軍備を見よ。一万の飛行機を一時につくるのに我々は海陸合わせて百台を越せないのである。軍艦といえども実に勢力は微小なものではないか。何ぞ奮起して勤めざるべけんや。

一、我が桐陰の美風何処に在るや

我が桐陰の美風。私は5年間この桐陰会の会員として来たのである。桐陰の美風というが、私はその美風をここがその桐陰の美風であるのだなあと嘆じたことがない。なんかどんよりとして美風を知ることのできなかったのは残念である。昔の美風がただ茫然と流れているのみで、現在の美風が流れていない様に思われる。我々は過去を顧みるのよりかそれよりもそれをすてて現在をつとめるのがよい。現在、桐陰の状況は如何であらうと思うに、少し乱れていると思う。諸君、忠実に奮励してこの桐陰の美風を大いに發揮しなければならぬではないか。このまま次第におとろえて行けば、附属の運命は危うくなるのである。真に忠実につとめて大いにその美風を發揮しなければならない。

一、奮励すべし

男児は須らく質実剛健を旨とすべし。丁度した物たとえば靴下、靴などを飾って見たりすることは実に男児として恥すべき行である。実に自ら努めて忠実にまじめに行うべきことには少しのことでもまじめに行わなければならない。私は電車の中などで時々衣服をきどっているものを見るその度毎に思う。彼と学業の競争をしたなら彼には必ず勝っているのだ。我々には大いに奮励してまじめに日々行つて行かなければならない。この競争激しい世の中に於てうかうかと寸時もゆるがせにしてはならない。世の中とは世界のことなり。日本の未来は実に危険なのである。此の国家のために尽くさざるべからず。死するまで奮励しなければならない。」

○1917年10月31日 (水)

晴天。第32回目の天長節。既望。観兵式。8時より式あり。先ず最敬礼を正面の御真影になす。君が代を歌う。次に勅語奉答を歌う。勅語次に校長の演説があつた。その次は天長節の歌をうたつた。

月は既望にして、左下が聊か消えたり。星、炯々とかがやきて、雲白く月の光をふくめり、瓦鱗相重なりて屋根をなす様日中に見るが如し。水影地にうつす。木の葉宛ら銀の葉の如し。月静かに動きて屋根の上に来れり。影を失いければ窗より戻りぬ。



○1917年11月1日 (木)
曇。別に記事なし。

○1917年11月2日 (金)
雨天。植物の臨時試験があつた。

*

1918年 (大正7年) [14歳]
高等師範 (現筑波大学) 附属中学校 3年

○1918年3月30日 (土)
雨天。英国、21日黎明の戦。18隻の中5隻は沈没、残る13隻はオステンド方面へ退却す。
英仏戦隊大勝。ダンカーク沖合の駆逐艦戦光景 (新聞の文章によりて想像して書く)。

独軍は巴里を距る120杆の地点に長距離射撃砲を設置して8分毎に発射して巴里を襲う。
大正7年3月24日午前7時再び砲撃を開始す。独軍は今や大攻撃を施し、97個師団この西部戦線に輸送せられ尚集中せらる。

その巨砲は51センチの物らしくその砲が或る距離までくると爆裂してその中の砲24センチ位のものが或る力によつて再び勢いを加えて巴里まで飛ぶ様なしかけであるそうである。
独逸の化学の力偉大なるというべし。〔独逸軍と佛蘭西軍との戦の地図のスケッチあり〕

○1918年3月31日 (日) ～ 4月2日 (火)
〔記載なし〕

○1918年4月3日 (水)
晴天。神武天皇祭。母が信州の方より帰つて来られた。後藤 (正雄) 中尉、東京 (所沢) 大阪間無着陸で無事飛行す。ワシントン伝をよむ。源九郎義経をよむ。腰越状の課を読んで、頼朝を益々悪み、義経に同情すること切なり。夜、葉書をかいに行き、深照燈、五条を見る。
電気博覧会のものならん。

落としたこと、3月31日、電気博覧会を見物に行く。

○1918年4月4日 (木) ～ 7日 (日)
〔記載なし〕



○1918年4月8日 (月)

晴天。春休は昨日で終った。9時、講堂に入る。新入学生徒の喜びや。その当時は早2年の昔となりぬ。併し、3年生となった今の心地は如何。喜びよりも先に、責務の重大なるを感じるのである。桜は今や満開なり。それ我等の固き決心を祝すにあらずや。

嘉納校長は、滾々と諭された。人となれ、実力を養え、大いに運動すべし。決心することとはまさしくこれである。今日、山内先生、亀山先生の両先生が学校を去らるる告別式があった。山内先生には殊に数学を教えて戴いていたのであった。懇ろに最もわかりやすく教えてくださった。その先生が今去らるるとなると悲しく残念である。並びに数人の諸先生が来られた。

第二校舎の二階の右より二番目の教室は我が3年級の行くべき所である。遙にのぞむその室を、その室に光をはなちたいものである。

臆^{やが}て帰宅した。夕方、毬投げをした。明日より愈々3年の事業に着手するのだ。

○1918年4月9日 (火) ～14日 (月)

〔記載なし〕

○1918年4月15日 (火)

晴天。少年鑑は僕の常にそばに置いてある本である。今日も有益なる話を読んだ。読めば読むほど深くあじわうことができる。

〔独逸と英仏との戦の地図のスケッチあり〕

